

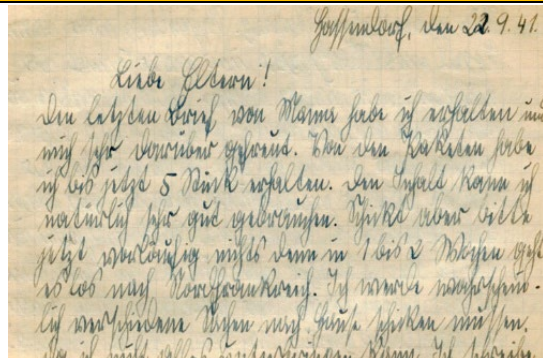
国際社会学部

小野寺 拓也

Takuya Onodera

現代世界論／中央ヨーロッパ

歴史学



ドイツ近現代史

専門はドイツ近現代史です。なかでも、ナチズムを主な研究対象としています。ナチスといえば、巧妙なプロパガンダによって人々を「洗脳」した、暴力によって無理矢理支配を行った、というイメージがまだまだ強いかもしれませんが、しかしそれはことの半面に過ぎません。ナチ体制は多くのドイツ人が同意、協力、支持、少なくとも黙認していたからこそ成り立っていた「賛同に基づく独裁」でもあったのです。そして、そのような体制が生まれた原因を知るためには、ドイツが歩んできた道のりをヨーロッパ史の枠組みの中で学ぶ必要があります。またナチズムという歴史が現在にまで及ぼす影響は、政治、外交、社会、文化など多方面に見て取れます。ナチスやホロコーストがドイツ近現代史の「全て」というわけではもちろんありませんが、今後とも「焦点」でありつづけることは間違いありません。

研究紹介

多くの「ふつうのドイツ人」はなぜナチ体制を支持したのか。それを明らかにしたいという思いは、研究を始めた頃も今も変わることはありません。そのために私が読み解いてきたのが、野戦郵便（右上写真）という、兵士が家族へと書き送った手紙です。そうした「エゴ・ドキュメント」と呼ばれる、「ふつうの人々」が残した人々の記録を研究しているうちに、「感情史」という研究領域にも強い関心を抱くようになりました。さらに近年は「歴史総合」教科書の執筆にも関わるようになり、歴史教育にも手を伸ばしつつあります。

担当授業

- ドイツ近現代史
- 考える世界史
- 感情史とは何か
- 歴史から教訓は学べるか—ヴァイマル共和国研究の諸問題

関連する分野

- 社会学
- 政治学
- ジェンダー論
- 歴史認識論

出版物

ナチズム研究

- 『野戦郵便から読み解く「ふつうのドイツ兵」』
- 『第三帝国—ある独裁の歴史』
- 『兵士というもの—ドイツ兵捕虜登頂記録に見る戦争の心理』
- 『エゴ・ドキュメントの歴史学』
- 『戦場の性—独ソ戦下のドイツ兵と女性たち』

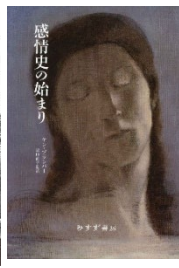
歴史総合の教科書など

- 『詳説歴史総合』
- 『歴史総合』
- 『歴史総合をつむぐ』



敗色濃厚な大戦末期にあって、なぜドイツ兵たちは戦い続けたのか。兵士の手紙5477通からその心性に迫る、エゴ・ドキュメントの歴史学。

敗色濃厚な大戦末期にあって、なぜドイツ兵たちは戦い続けたのか。兵士の手紙5477通からその心性に迫る、エゴ・ドキュメントの歴史学。



国際社会学部

ドイツ近現代史ゼミ



→ケバブはドイツの代表的料理！（個人の見解です）



それぞれ誰だかわかりますか？

どのようなゼミか

本ゼミは、ドイツ近現代の歴史全般を対象としています。時代的には、19世紀初頭のナポレオン戦争あたりから、1989/90年までが対象となります。ドイツはこの間、ドイツ連邦、ドイツ帝国、ヴァイマル共和国、ナチ・ドイツ、連合国による占領、東西ドイツ、統一ドイツとめまぐるしい変化を遂げてきました。さらに、歴史教育、記憶、「過去の克服」、メディアと歴史、「パブリック・ヒストリー」といったテーマもこのゼミでは扱っています。

ドイツ史について話すとき、私はよく「目的としてのドイツ」と「方法としてのドイツ」という言葉を使います。「目的としてのドイツ」というのは文字通り、ドイツについて学ぶこと自体が目的ということです。ナチスやホロコーストに関心がある。ドイツの移民・難民政策に興味がある。ドイツの「過去の克服」について知りたい…。ドイツを学びたいと思う動機はいろいろあるでしょう。

他方、私がここで強調したいのが「方法としてのドイツ」という視点です。ドイツの歴史を学ぶことは、ヨーロッパや世界の歴史を知る上でも非常に有益だ、ということです。たとえば、「包摂と排除」というナショナリズムのメカニズムは、ほぼすべての国家に見られます。ですが、人種的な基準によって国民を統合し、「他者」とされた人びとは追放・殺害するという極限まで「包摂と排除」を推し進めた体制は、ナチ体制以外にほとんど類例がありません。プロテスタントとカトリックの対立・共存、帝国主義政策、ヨーロッパ統合、資本主義と社会主義の対立、環境保護政策、脱原発、移民・難民政策など、さまざまな面において、ドイツはしばしば先駆的、ある意味で「極端」な道のりを歩んできました。しかしだからこそ、ヨーロッパや世界が抱える問題点を、きわめて明瞭なかたちで示してきた、非常に興味深い国でもあるのです。

（現代世界論コース 小野寺拓也ゼミ）

小野寺ゼミの特徴を簡潔に表現すると、「コツコツ、綿密、静かな情熱」の三点だと思います。三年次は前半に先生の専門である近現代ドイツ史・ナチズム関連の文献講読を通じて、専門的な資料を深く読む練習を行い、後半には卒論執筆の予行練習として8,000字程度の小論文に取り組みます。初めての論文執筆はちょっとヘビーだけれど、問いのつけ方や論文のアウトライン構成・執筆スケジュールの立て方など、論文執筆のプロセスを一から学べます。そして四年次には卒論本番！前年の“練習”を糧にして、一つのテーマにじっくり向き合います。

論文執筆では、書くことそのものと同じくらい、書くための「事実集め」に根気と時間が必要でした。特に小野寺ゼミの主軸となる歴史学では、事実の長い積み重ねを読み解く力が求められるため、文献チェックに骨が折れる日もありますが、玉石混交の情報が溢れる現代を生きる中でも不可欠な、正しい事実を見極める力がつくはずです。（大橋彩乃）

卒論

- ナチ体制における外国人との性的接触—「ドイツ人の血と名誉を保護するための法律」の実効性—
- 18世紀以降のドイツにおける自然・景観と人間の関係—自然愛・環境意識の歴史的形成—
- 近現代ドイツ移民労働史と女性
- 共通教科書が目指す歴史教育の課題と可能性—独逸共通教科書と独仏共通教科書の比較研究—

おススメの本

- ポイカート『ナチス・ドイツ—ある近代の社会史』
- カーショール『ヒトラー』
- 竹中亨『帰依する世紀末—ドイツ近代の原理主義者群像』
- 石田勇治『過去の克服—ヒトラー後のドイツ』
- マクシム・レオ『東ドイツ ある家族の物語』